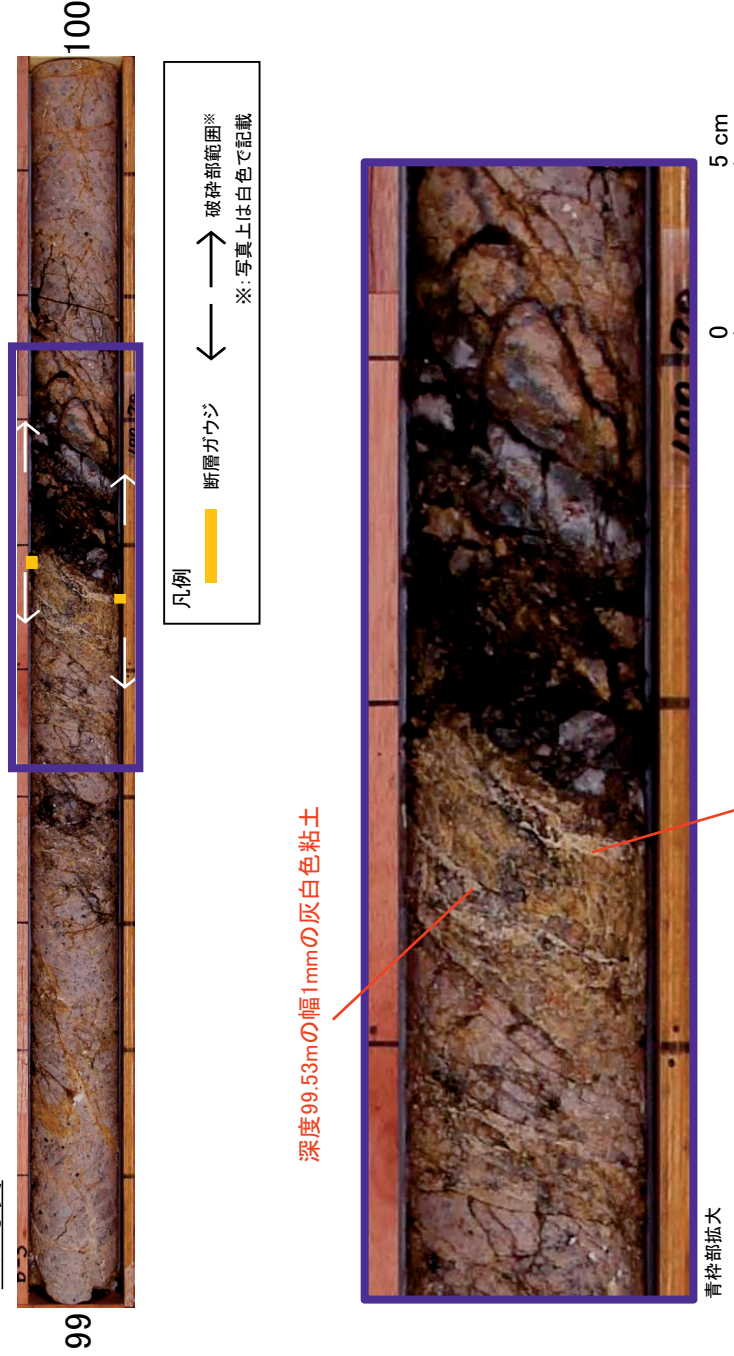


- ・深度99.50～99.56mの「粘土混じり岩片状」と記載の箇所については、やや軟質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- ・深度99.53mの「上端と平行で直線的な幅1mmの灰白色粘土」と記載の箇所については、軟質で、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかったが、粘土の連続性が乏しい。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。含まれる細粒部は、変質したカタクレーサイト中の粘土脈である。
- ・深度99.56～99.57mの「礫混じり粘土状」と記載の箇所については、変質を受けており、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかったが、やや硬質で、粘土の境界面は波打ち直線性に乏しい。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- ・一方、深度99.56～99.57m間にはフィルム状の細粒部が挟在しており、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかった。これらのことから断層ガウジとして扱ったこととした。
- ・深度99.57～99.68mの「砂混じり岩片状」と記載の箇所については、硬質で、粘土脈は分布せず、原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質も細粒化した岩片からなる組織が認められる。これらのことからカタクレーサイトであると判断した。

ボーリング柱状図

- 99.50～99.68m：破砕部
- 99.50～99.56m：粘土混じり岩片状部 (Hj)
- 上端43°で直線的に、下端38°で波打って連続。上端とほぼ平行な数本の割れ目と、これに直交～60°斜交する割れ目で径5～10mmの硬さ「E」の岩片に細片化する。岩片間に幅1～3mmの白色軟質粘土が脈状に分布する。一部にマンガン鉱染伴う。明黄褐色を呈する。幅45mm。
- 99.53mには上端と平行で直線的な幅1mmの灰白色粘土を挟む。
- 99.56～99.57m：礫混じり粘土状部 (Hc-2)
- 傾斜38°で上下端とも波打って連続。径1～3mmの一部マンガン鉱染で黒色化した石英粒を10%程度含み、フィルム状の細粒部が挟在している。やや硬質。灰白色を呈する。幅5～10mm。
- 99.57～99.68m：砂混じり岩片状部 (Hj)
- 上端38°で波打って、下端37°で直線的に連続。上位のHc-2の粘土と平行な数本の割れ目とこれに直交～60°斜交する割れ目が多く、径5～20mmに岩片化する。岩片間には粘土は殆んど分布せず。砂状部を挟む。マンガン鉱染のため黒色化し、褐灰色を呈する。幅85mm。

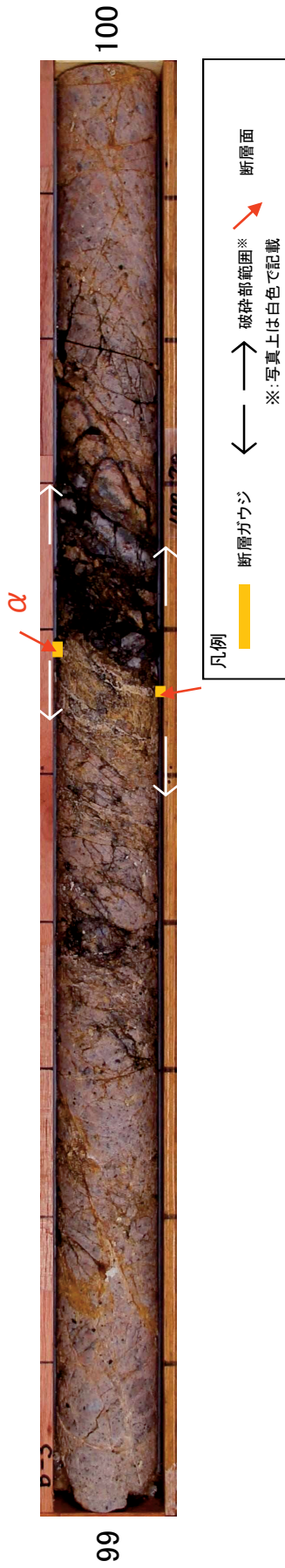
コア写真



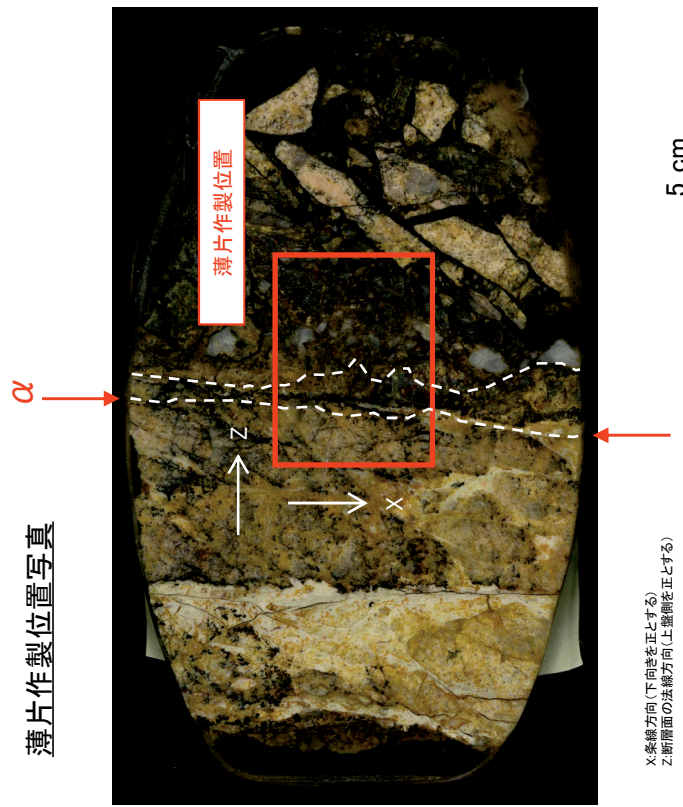
・薄片は断層面 α 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

※断層面 α は最新活動面

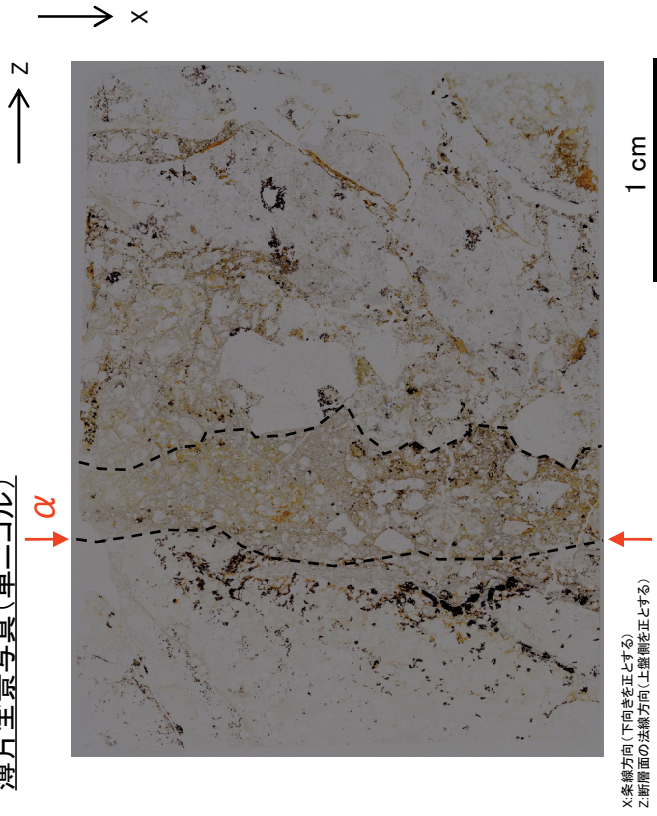
コア写真



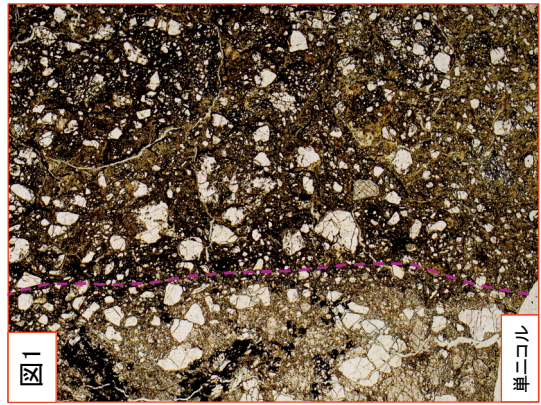
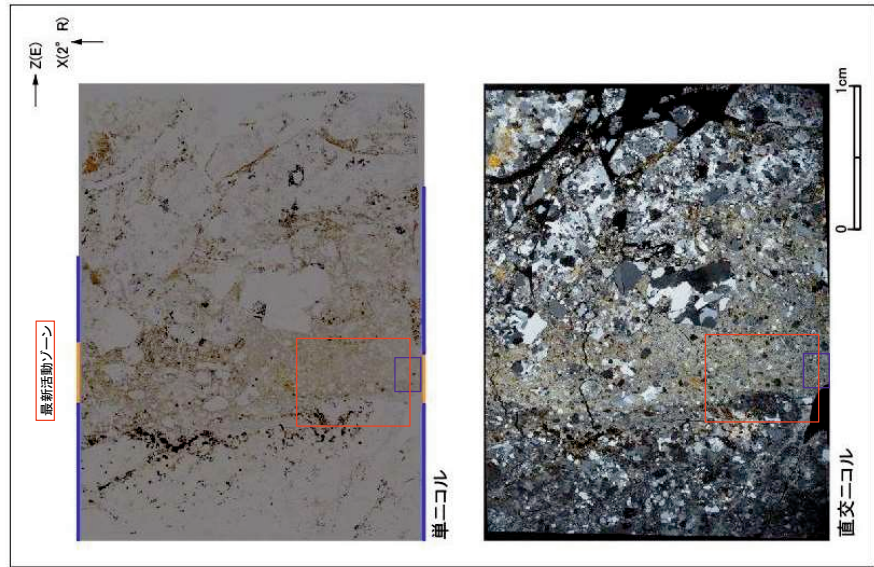
薄片作製位置写真



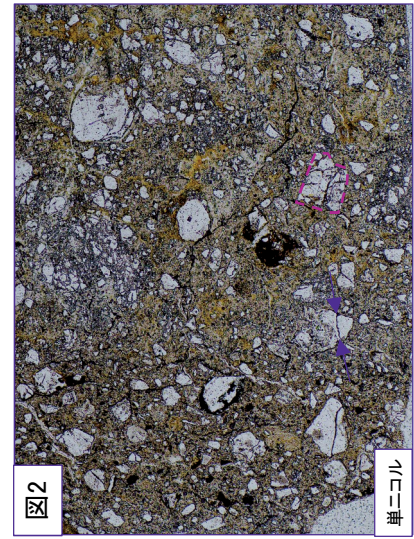
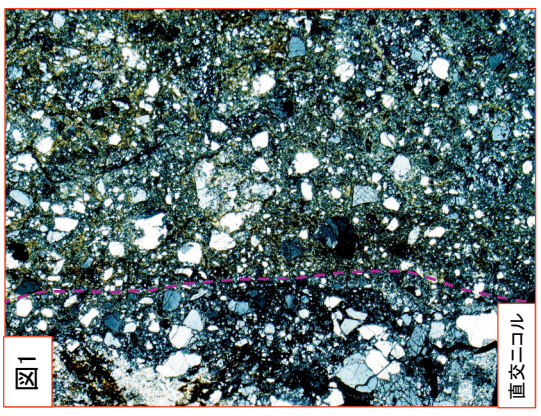
薄片全景写真(単ニコル)



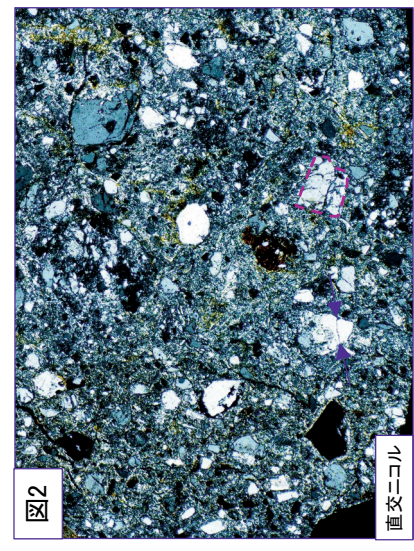
- 最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
- 基質は粘土鉱物を主体とする。(図2)
- 粘土状部の分布は帯状で直線的である。(図1)
- 岩片は少ない。(図2)
- 丸みを帯びている岩片が多い。(図2)
- 岩片の粒界を横断する破断面が認められる。(図2)
- ジグソー状の角礫群が認められる。(図2)



破線は帯状で直線的な粘土状部の範囲を示す



青矢印は岩片の粒界を横断する破断面を示す
破線はジグソー状の角礫群の範囲を示す



(肉眼観察結果 深度99.56m)

- 肉眼観察では、礫混じり粘土状部にはフィルム状の細粒部が挟在しており、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかった。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

(観察位置)

- 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面 α に沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の無い部分で作製した。

※断層面 α は最新活動面

(薄片観察結果)

- 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。
 - 基質は粘土鉱物を主体とする。
 - 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
 - 岩片は少ない。
 - 丸みを帯びている岩片が多い。
- 薄片観察では、以下の通りカタクレーサーサイトの特徴が認められた。
 - 岩片の粒界を横断する破断面が認められる。
 - ジグソー状の角礫群が認められる。

最新活動ゾーンには、断層ガウジとカタクレーサーサイトの特徴が認められるが、カタクレーサーサイトの特徴は、カタクレーサーサイトに断層ガウジに取り込まれたものと考えられる。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- 肉眼観察で確認された礫混じり粘土状部は、原岩組織の有無が判断できないことから、断層ガウジとして扱うこととした。
- 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。

断層ガウジ・ 断層角礫の有無	断層ガウジ・ 断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・ 変形構造 *
有	1.0	無

*: 断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。
断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「-」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

・深度115.00～115.12mの「粘土混じり礫状」と記載の箇所については、やや硬質で、含まれる細粒部は網目状に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化された岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。

・一方、破砕部の上端と下端にはフィルム状の細粒部が挟在しており、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかった。また、コアの一部が欠落し、連続性は不明であるが、やや軟質で直線的にフィルム状の細粒部が分布する。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

ボーリング柱状図

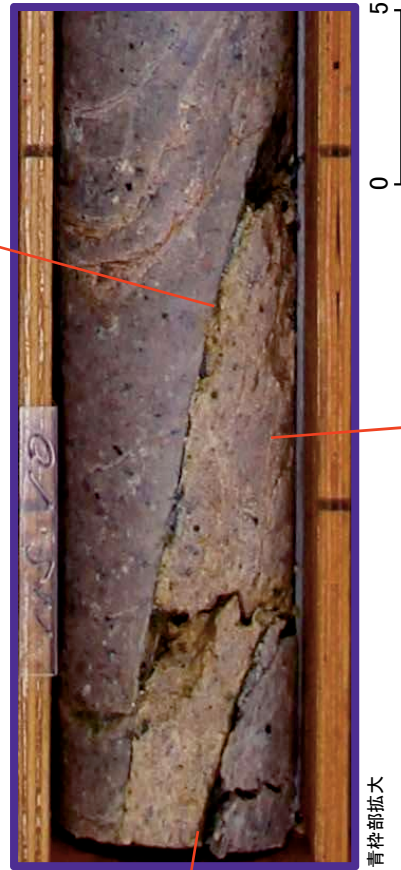
●115.00～115.12m：破砕部
粘土混じり礫状部 (Hj)
上端80°、下端80°でいずれも直線的に連続。上下端とも緑灰色のフィルム状粘土を挟む。径10～30mm程度の岩片主体で岩片間に浅黄色粘土を伴う。岩片には定向配列が見られる場合がある。にぶい橙色を呈する。
幅30mm。

コア写真



凡例
 断層ガウジ
 破砕部範囲※
 ※: 写真上は白色で記載

深度115.12mのフィルム状の細粒部



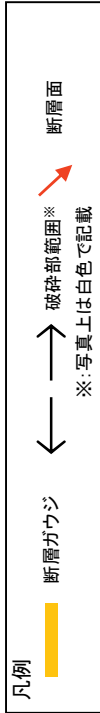
深度115.00mのフィルム状の細粒部

細粒部が網目状に分布する

・薄片は断層面 α 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

コア写真

※断層面 α は最新活動面



薄片全景写真(単ニコル)

薄片作製位置写真

